われら九人の戦鬼

柴田錬三郎

われら九人の戦鬼

昭和四〇年七月五日　第一刷

定価　四九〇円

著　者　柴田錬三郎

発行者　上林吾郎

発行所　文藝春秋新社
東京都中央区銀座西八ノ四

印刷所　凸版印刷

製本所　矢嶋製本

＊乱丁・落丁のものはお取替えいたします

© 1965 Renzaburo Shibata　Printed in Japan

われら九人の戦鬼

柴田錬三郎

文藝春秋新社

装幀

中尾　進

月と女と

満月が、新戦場を、照らしていた。
千騎と千騎が、激突し、血みどろになって闘った野を霧がつつみ、それに、月光が落ちたのである。
自然は、永劫に絶えることのない人間の争いとはかかわりなく、静かな夜を迎えていた。
新戦場に、もう、物音は絶えていた。
夜の静寂は、深いのであった。
と——。
白い闇の中に、騎馬の音が、迫った。
数騎である。
おそろしい迅さで、死の原野を一気に駆けぬけて、西方にわだかまる丘陵の松の木立の中で、蹄の音を、止めた。
この丘陵は、ぜんたいが砦になっていて、かなりむかしから、一隊がたて籠っていた模様である。
頂上には、かなりな構えの陣屋が建てられていた。
これを守備していた者たちは、今日、滅びはてた。
敵が放った火で、なかば焼けおち、月光は、その惨たるすがたへ、不気味な凄みをおびさせている。
黒影の群は、木立の中で馬をすてると、陣屋へ、のぼって来た。
先頭の者が、人をせおっている。月明りに、はっきりと、女と判る。
死んだように、ぐったりとなっている。
せおっているのは、具足武者であった。それにしたがっているのは、足軽たちのようである。
ようやく余燼のおさまった焼跡をふみこえて、陣屋の中に入ると、武士は、女を板敷きにおろして、
「あかりだ」
と、云った。
燭台がさがし出され、やがて、赤い灯火が、闇をすみずみへ、押しやった。
意識をうしなっている女は、まだ若く、美しい顔だちであった。
ゆれる灯の中で、顔にさした陰翳もゆれ、それがなまめかしかった。白いやわらかな肌理の頬やあごやのどが、この陰惨な屋内で、いたましいくらい清純なのであった。
まとった衣裳が、かなりの身分を示している。
裳裾がみだれて、白い脛がのぞいていて、それへ、足軽たちの視線が、集中していた。武士が、そのあさましい視線に気がついて、
「おい、もう、よい。外へ出ろ」
と、命じた。
武士は、いかにも度胸と膂力のありそうな、逞しい風貌と体軀の持主だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

四人の足軽は、これと対蹠的に、下卑た面つきと、うすよごれた恰好をしていた。
武士が、一軍の旗本の中でも重きをなす母衣（ほろ）衆ならば、足軽たちは昨日野伏だったのが、臨時にやとわれた虫けら同様の雑兵であった。
武士は、足軽などを、人間あつかいにはしていなかった。
「おいっ！　外へ出ていろ、と申すのだ！」
武士は、足軽たちが、意外にも、おし黙って、そこを動こうとせぬのに、声を荒げた。
にも拘らず――。
「……」
「……」
「……」
「……」
四つのきたない顔が、目玉を底光らせて、依然として、動こうとせぬのだ。
「ええい！　おのれら――」
武士は、ようやく、足軽たちの肚の中を読んで、すっくと突っ立った。
「おれが、敗軍の侍大将と、あなどったか、おのれら！　毛利伝十郎は、おのれら野伏あがりに、見くびられるほど、まだ、鋭気が衰えては居らんぞ！」
腰の大刀に、右手をかけて、にらみつけた。
すると、足軽たちは、まるで、この瞬間を待っていたように、顔を見合せた。
そして、一人が、
「その姫様を、どうするね、侍大将？」
と、たずねた。
いかにも横柄な口のききかたであった。野伏あがりだから、言葉づかいを心得ているわけはないが、語気が、毛利伝十郎を、なめきっていた。
「どうしようと、おのれの知ったことか！」
「そりゃ、まあ、そうだが……、気になる」
「うるさいっ！　出て行け！」
伝十郎は、いきなり、抜刀した。
四人は、一斉に立った。
しかし、怯えて立ったのではない証拠に、退くかわりに、横の間隔をひらいた。
つまり、たたかうための陣形をとったのである。
伝十郎は、愕然となった。
虫けら同様の小者が、反抗しようとは！　夢にも考えなかったことである。
伝十郎の五体に、かあっと、憤怒の血がたぎった。
足軽たちは、伝十郎のこんたんを看破したのである。
意識を喪っている女は、敵将の息女であった。
敗軍の母衣衆としては、これを拉致して、わがものにし、あわよくば、高い身代金を要求する――その復讐をなそうというわけであった。
この四人の足軽は、伝十郎が、偶然、戦場で生き残っているのを、ひろって来たのである。

よもや、この足軽が、伏兵になろうなどとは、この砦に帰りつくまで、想像もしていなかった伝十郎である。
闘いの陣形をとられてみて、この四人が、ただの小者ではなかった、と判った。
しかし、武辺の面目として、この手輩と妥協はできなかった。
「来いっ！」
伝十郎は、身構えた。
戦場数を踏んでいる毛利伝十郎であった。
野伏あがりの雑兵どもに、敗れるなどとは、夢にも、考えていなかった。
いきなり、一人へむかって、呶号すさまじく、躍りかかった。
次の瞬間であった。
——こやつら、ただ者ではない！
そう直感して、背筋に悪寒を這わせたのは。
斬りつけた一人は、まるで、風のような迅さで、とび退っていたし、ほかの三人は、その場を動きもせずに、黙って、平然と立っていたのである。
「うぬっ！」
伝十郎は、奮然と、四人を睨みまわすと、
「おのれら、どこかの忍びか！」
と、呶鳴った。
「野伏から、忍びに、格上げしてくれたぜ」
一人が、ひっひっひ、と嘲罵的な笑い声をたてた。
「侍大将。おれたちを、買いかぶらんでもいいぜ。おれたちは、ただの百姓上りさ。……ただ、あっちの戦場や、こっちの戦場をうろうろしているあいだに、滅多に斬られねえコツをおぼえただけよ」
「ほざくな！」
伝十郎は、次の一人へ、一太刀あびせた。
対手は、苦もなく、身を沈めて、刃風を頭上に、喰り過ぎさせた。
伝十郎は、もはや、我慢ならず、猛然とあばれはじめた。
足軽たちは、四方へとびはねて、逃げていたが、そのうち、一人が、
「おれが、一番乗りだぞっ！」
と、叫んだ。
伝十郎には、それが何を意味するか、すぐ判って、かっとなるや、
「くそっ！」
その男めがけて、とびかかった。
その刹那、
「おれだっ、一番乗りは！」
背後で叫びざま、一人が、伝十郎へ、突きかけた。
あやうく、それをかわしたが、体勢が崩れた。
その隙につけ込んで、ほかの一人が、
「やったあっ！」
と、刀をまっすぐに突き出して、板敷きを蹴った。
脾腹をふかぶかと刺しつらぬかれた伝十郎は、野獣のよ

うな唸り声をたてて、白刃を旋回させた。
それが、一人のあごを殺いだ。
「ちっ――いてえっ！」
はねあがって、あごをおさえた男は、その怒りを、一撃にこめて、伝十郎の脳天へ、片手なぐりに、斬り下した。
伝十郎は、たまらず、ぐらぐらと上半身をゆれさせて、板敷きへ、崩れ込んだ。
「おれだぞ！　一番乗り！」
脾腹を刺した男が、顔の返り血をぬぐいながら、どなった。
「いいか、おれだぞ、一番乗りは！」
その男は、もう一度、高声でくりかえした。
あとの三人は、返辞をしなかった。
「おい、きこえているのか！」
呶鳴っておいて、倒れている女へ、近づこうとした。
とたんに、一人が、
「弥蔵、籤だ。籤にせい」
と、云った。
「ごめんだ。おれが、この侍大将をやっつけたのだぞ。一番乗りにきまって居る。戦場の作法と申すものだわい」
弥蔵は、断乎として、肯かずに、女へ、手をかけた。
すると、三人のうち、二人が目くばせしあった。
次の瞬間――。
二人は、同じ迅さで、躍り立ちざま、左右から、弥蔵へ、一太刀ずつ、あびせた。
肩と腰を斬られながら、弥蔵は、屈せず、白刃とともに、からだを、独楽のように、旋回させた。
もとより、二人を、手負わせるにはいたらず、血ぶるいして、つっ立つと、
「おのれらっ！」
と、喚いて、振りかぶった。
そこをまた、二人から、同時に、襲いかかられて、こんどは、絶鳴をあげて、のけぞった。
二人は、ぶっ倒れた弥蔵へ、冷淡な視線を落していたが、どちらからともなく、顔を見合せた。
「籤か？」
一人が、云うと、もう一人が、かぶりを振った。
「はずれた方が、腹が立つ。一緒に、なぶろうではないか」
「それもよいのう」
にたりとして、のこりの一人を、かえり見た。
その男は、ずっとはなれたところに、うずくまっていた。
「柿丸――貴様は、どうする？」
「どうもせん」
「どうもせん？」
「わしは、見物して居る」
「ふん。どんじりでも、我慢するというのか？」
「いいや。わしは、お主らのように、飢えては居らん」
「飢えて居らんはずがあるか」
「女は、欲しゅうないのじゃ」

「禅坊主のようなことをぬかすな」
「本当だから、しようがない。お主らは、あさましすぎる」
「なんだと！」
二人は、柿丸を睨みつけた。
柿丸は、そっぽを向いた。
「すてておけ。わしらはわしらで、勝手にやろう」
「そうだの」
二人は、女のそばへ寄った。
四つの手が、みるみる、女の衣裳を剝ぎとりはじめた。
二人の足軽のまなこは、飢えた野獣の光を、ぎらぎら放っていた。
その光が、あらわになった若い肌へ、ぶすぶすと、突き刺さった。
四本の手は、ついに、女のからだから、まとうたものを、一枚のこらず、剝ぎとった。
赤い灯火に照らされた白い肢体は、まだ熟しきらぬ清楚で繊細なおさない線をのこしていた。しかし、白蠟のようになめらかなその曲線は、たとえようもなく、美しい。
二人の足軽は、ともに、ごくりと、生唾をのみ込んだ。
この時、奥にうずくまっている柿丸が、ひくく、
「あぶない！」
と、つぶやいた。
その独語は、女体に目をうばわれている二人の耳には、きこえなかった。
いや、上階に、あきらかに、人の動く気配が起っても、なお、二人は、気がつかなかった。
階段を降りて来る、みしっみしっ、という音で、はじめて、二人は、はっと、険しい視線を、向けた。
降り立ったのは、着流しの牢人者であった。
三十がらみの、眉目に、野性の翳のある人物であった。貌ぜんたいが、くらいのだが、それを救っているのは、ひきむすんだ口もとの気品であった。
ただの牢人者とは思われなかった。
但し、みなりは、いかにも貧しかった。
「そのあたりでよかろう、女をいじめるのは——」
そう云った。
声音は、冴えている。
二人の足軽は、刀をつかむや、とびかかる身構えをとった。
獲物を襲わんとする猛獣に似ていた。
牢人者は、平然として、左手に、かなりの長剣を携げて、立っている。
足軽たちは、左右へ、じりじりと、はなれた。
「お主たち。おれは、そこに死んでいる侍大将のように、そうたやすくは、片づけられぬぞ」
そう云う牢人者の顔に、冷たい薄ら笑いが、刷かれた。
先刻から、上階にいて、一部始終を視下していたに相違ない。
いままで、沈黙を守っていたのは、他人事に対して、無

関心な気象であろう。
女が、一糸まとわぬ素裸にひきむかれたのを看て、それがういういしい処女の肌であったので、腰を上げたのだ、と思われる。
足軽たちは、対手がなにをうそぶこうが、これを殺す一念しか持たなかった。
牢人者は、完全に、敵二人から、左右一直線に、地歩を占められた。
にも拘らず、べつに、身構えようともしないのであった。
闘いは、一瞬にして、決した。
左右から、躍った足軽たちの速影が、牢人者の前と後を、とびちがった。
そして、それぞれ、仲間が立っていたところまで、跳んだ。
とみえた時、かれらは、ともに、のどから、噴水のように血汐をほとばしらせて、よろめき崩れ、板敷きを、響かせていた。
牢人者は、依然として、同じ場所に、立っていた。ちがっているのは、右手に、白刃を握っていることであった。
おそるべき迅業を発揮したものである。これは、ただ修羅場の場数をふんでいるだけで、なせる業ではなかった。異常な修業を積んでいる、と判る。
牢人者は、やおら、頭をまわして、奥にうずくまる柿丸を、視やった。
「おい、お前は、どうする？」
そう問うた。
柿丸は、じっと、見かえして、
「どうもいたさぬ」
「仲間が斬られても、腹は立たぬのか？」
「べつに、好んで仲間になったわけではござらぬ。雑兵になっているうちに、偶然、四人生きのこっただけでござる。その侍大将が、手を貸せと申されるから、手つだったまでのことでござる」
「ふん——」
牢人者は、薄ら笑った。
「お前だけは、此奴らとは、すこしちがっているようだな。女に興味はない面をして居るし、傍観者になったのは、どうやら、ただの小ずるさではなかろう」
「……」
柿丸は、なぜか、ぺこりと頭を下げた。
この時、倒れている女が、ひくく、呻いた。
牢人者は、白刃を鞘におさめると、ひとつ大きく背のびしてから、
「……くだらぬ」
と、つぶやいた。
「お手前様は、強うござるな」
柿丸が、云った。
「世辞は止めろ」
牢人者は、その場にあぐらをかくと、
「酒が欲しいところだ」

と、云った。
「酒なら、ござる」
柿丸は、立って、牢人者のわきを通って、おもてに出て行った。馬の鞍へ、瓶（かめ）をくくりつけているのを思い出したのである。
牢人者は、柿丸がわきを通りすぎる時に、視やって、まだ二十歳を越したばかりの若者なのをみとめた。
女が、どうやら意識をとりもどした様子に、視線を移して、刀のこじりで、はだけた衣裳をはねて、前をかくしてやった。
若い女の美しい裸形など、一向に興味もないようなしぐさであった。
女は、はっきりと、おのれをとりもどすや、はじかれたように、はね起きた。
牢人者は、女が怯えながらあとへいざるのへ、じろりと、冷たい一瞥をくれた。しかし、べつに、声をかけようとはしなかった。
柿丸が、瓶を携げて、もどって来た。
木椀（きまり）も持っていて、それへなみなみと、白い液体を盛って、牢人者の前に置いた。
それから、女の方へむきなおって、
「気を失っているあいだに、形勢が変り申した。そなたを手ごめにしようとした者らは、見られるように、一人のこらず、相果ててござる」
そう告げた。
女は、なお、怯えの色を、顔にうかべている。
「わしも、そなたを拉致するのを手つだった一人じゃが、べつに、色情に狂っては居らん。……そなたを、救ったのは、このご牢人衆じゃ。礼をのべたがよかろう」
「余計なことを云うな」
牢人者は、二杯目をのみほしてから、木椀を、柿丸へさし出した。
「お前も、やるだろう」
「いや、わしは、一滴もやり申さぬ。この酒は、侍大将のものでござった」
「お前は、存外木訥な男らしいな」
牢人者は、笑った。
歯が、皓かった。
「木訥ではござらぬ。酒がきらいなだけでござる」
柿丸は、いかにも、不服げに、云った。
「それは、どこの娘だ？」
「この砦を滅ぼした高明寺高政の息女梨花どのらしゅうござる」
「相違ないか、女？」
牢人者は、訊ねた。
「はい——」
女は、うなずいた。
「いくさに敗れた腹いせに、敵将の娘をかどわかして、手ごめにしようとは、考えたものだったな」
牢人者は、三杯目をなみなみと、注いだ。斗酒なお辞せ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ずのようであった。
それを見まもる柿丸のまなざしが、畏敬の色をふくんでいた。
「お手前様は、どうして、ここに、在られたのでござろうか？」
「この砦の守将が、旧知だった。たずねて来たら、滅んで居った。人間の運は、わからぬ。天下人を夢みて居る奴だったが……」
「お手前様が、一日早く到着されていたならば、勝敗はどうなっていたか、わかり申さぬ」
「世辞は止せ、と云っているぞ。……おれは、野良犬だ。軍略など、何も知らん。第一、いくさに加わるためにやって来たのではない」
「そのようなことを申される御仁こそ……、いや、これも世辞になると、叱られそうだから、やめておこう」
柿丸は、かぶりを振った。
牢人者は、やおら、立ち上った。
「おれは、出て行く」
「あいや！」
柿丸が、呼びとめた。
「お手前様は、おいそぎでござろうか？」
「いそぐ？　はははは っ」
牢人者は、声をたてて笑った。
「多門夜八郎に、急ぎの用など、あろうはずがない」
――たもん、やはちろう！
柿丸は、その姓名を、脳裡にたたみ込んでおいて、
「それでは、ひとつ、お願いの儀がござる」
「なんだ？」
「この高明寺高政殿の息女を、館まで、おつれ頂けますまいか。お手前様としては、助けたついで、と申すもの」
「莫迦を云え。救ってやったからといって、家までとどけてやる義理などはない」
「ほうびなど、欲しい御仁とは見え申さぬが……、女子はきらいでござるか？」
「好きだな」
「それでは、おつれ下され。梨花どのは、美女でござる」
「お前に云われなくとも、わかって居る」
「お願い申す」
柿丸は、両手を板敷きへついて、頭を下げた。
「お前が、つれて行け」
「それがしは、拉致した者でござる。つれて行くことは、叶い申さぬ」
「それでは、女を、ここへ　すてておけ。足があれば、歩いて帰るであろう」
「お手前様は、よほど、ひねくれたご気象でござるようじゃ」
柿丸は、歎息した。
この時、梨花が、きっと、顔をあげた。
「わたくしは、もう、館へは、戻れませぬ」
「戻れぬはずがあろうか」

柿丸が、かぶりを振った。
「館では、いまごろ、大騒ぎをしてござろう。戻れば、大よろこびをされるじゃろう」
「いいえ！　いったん敵の手にとらわれた者が、生きておめおめと戻ることは、できませぬ。……わたくしも、左様な恥辱には、堪えられませぬ」
「そなたの家では、そのように、家門の栄誉を誇って居るのか？」
夜八郎が、急に、鋭い視線を、梨花にくれた。
「桓武平氏（かんむへいし）以来の家ならば、当然でありましょう」
「そうか。そなたは、心から、そう思っているのだな？」
「思って居ります」
「よし！」
夜八郎は、柿丸を、振りかえると、
「お前は、おもてへ出て居れ」
と、命じた。
「どうなされるぞ？　まさか、これだけの美女を、むざと、殺されるのではござるまいな？」
「殺しはせぬ。犯すのだ」
夜八郎は、平然として、云ってのけた。
犯す、と云われて、柿丸は、唖然となった。
「どういう存念かのう？」
「よけいなことを、きくな！」
「それは、まあ……、人それぞれ、思案はあるじゃろうが……」
柿丸は、べつに、反対する理由も、思い当らなかった。
梨花が、家門の栄誉に誇りを持っている、と云ったのが、多門夜八郎のカンにさわったのである。
柿丸には、夜八郎が腹を立てた気持が、わかるような気もしたのである。
やがて――。
柿丸は、どこで見つけたか、柄の焼けた鍬を片手に携げて、廃墟に立った。
毛利伝十郎と仲間三人の屍骸を、葬ってやろう、と思いたったのである。
戦場の討死者は、味方が敗北した場合には、そのまま、野ざらしになってしまうのがならいであった。柿丸としても、べつに、葬ってやらねばならぬ義理はなかったが、この男の心には、そんな優しさがのこっているとみえた。
ざくっ、ざくっ、と土を掘り起しながら、柿丸は、口のうちで、なかば無意識に、念仏をとなえていた。
そのうち、柿丸の脳裡には、十年前の思い出が、よみがえっていた。
十年前、十一歳の柿丸は、病弱な母親につれられて、東国へむかって、旅をしていた。母親は、なぜ、東国へ行こうとするのか、息子には、打明けていなかった。しかし、柿丸の方では、うすうす感づいていた。
母親は、ある軍勢が暴風雨のような勢いで、通過じて行った道筋の農夫の娘であった。その時、髯武者の一人に、

犯されて、柿丸を生んだのである。髯武者は、東国の住人であることを告げて、去っていたので、母親の念頭から、まだ見ぬその土地のことが、はなれなかった。
その髯武者が、でたらめを告げたのかも知れないし、本当であったとしても、はたして、まだ生きているかどうか、わからなかったが、息子が大きくなるにつれて、母親は、一目会わせたい想いがつのって来たのである。
そして、ある郷士の家の下婢をしていた母親は、思いきって、柿丸をつれて、東国をめざしたのであった。
だが、病弱な女にとって、生れてはじめての長旅は、到底無理であった。
もう、故郷にはひきかえせない遠い他国まで来て、母親は、倒れた。
ある古刹の裏にある墓守りの小屋で、十日あまり寝てから、息をひきとったのであるが、その臨終で、母親は、柿丸に、はじめて、父親の名を告げたのである。
柿丸には、横川勘兵衛というその名など、おぼえておく気持はなかったが、なんとなく、いまも、脳裡に、刻んでいる。
柿丸は、墓守りが、老爺であったので、自分一人で、墓穴を掘って、母親のなきがらを埋めたのであった。
――あの夜も、月がきれいじゃった。
柿丸は、大きく掘りひろげた墓穴へ、月光が降って来るのを眺めて、胸のうちで、呟いた。
母親のなきがらは、少女のように、小さいものになっていた。それを、そっと、穴底へ横たえた時、月光をあびた死顔が、十一歳の柿丸には、大層美しいものに見えたことである。
柿丸は、泪をぽたぽたとこぼしながら、その死顔へ、土をかぶせたものであった。
その思い出をよみがえらせて、柿丸は、胸の底に、微かな痛みをおぼえている。
「つらかったのう」
思わず、そう呟いてから、柿丸は、われにかえり、墓穴から、はい上った。
四個の死体は、近くに、ならべて、寝かせてあった。
それを、つぎつぎと、墓穴へはこんで来た柿丸は、葬りおわると、
「殺しあった者同士が、一緒に葬られるのは、あじけなかろうが、あきらめてもらおう。穴を四つも掘ってやるほどの親切心は、持たぬ」
と、ことわって、合掌した。
それから、ゆっくりと、建物へひきかえして来た。
恰度その時、多門夜八郎が、出て来た。
「犯されたかな？」
柿丸は、訊ねた。
こんな質問は、ひどくばかげている。
夜八郎は、こたえずに、歩き出そうとした。
「梨花どのを、すてて行かれるのか？」
「お前に、まかせる」

「それは、迷惑至極でござる」
柿丸は、かぶりを振った。
「お前は、どうやら、善良な若者らしい。不運な娘を世話するために、ここにいるようなものだ」
「勝手なことを申されるものじゃ」
不運な女など、母親を見ただけで、たくさんである。
あの梨花が、この牢人者に犯されたために、もし、懐妊したら、どうなるというのであろう。
柿丸が、一人だけ、仲間からはずれて、傍観者の立場をえらんだのは、不幸な母親のことを思い出していたからである。
「お願いでござる。梨花どのを、おつれ下され」
夜八郎は、こたえず、歩き出そうとした。
「梨花どのが、もし、お手前様の子供を生んだら、かわいそうでござる」
「子供を生む？」
夜八郎は、柿丸の言葉に、頭をまわした。
「お前は、なぜ、そんな想像をするのだ？」
「……」
柿丸は、ちょっと、返答に窮した。
「そうか」
夜八郎は、合点した。
「お前が、そうやって、生れて来たのか」

野の果て

丘陵の麓に、かなりの騎馬の音が、起ったのは、その時であった。
夜八郎は、ちょっと、耳をすましていたが、柿丸を振りかえると、
「おい――、どうやら、かぎあてられたようだな」
と、云った。
「高明寺高政の手勢だと、申されるのか？」
「敗走して来た者どもなら、あのように馬脚に力をあまさせては居るまい」
蹄の音をきいただけで、それを判断できるには、相当の経験を積んでいなければならぬ。
――この牢人衆は、いよいよ、ただものではないようだ。
柿丸は、あらためて、自分に呟いた。
「いかがされるかな？」
柿丸は、たずねた。
「女に、きいて来い」
「かしこまった」
柿丸は、すばやく、屋内に駆け入ると、板敷きに巨きく映した影法師を、ゆらゆらとゆらめかせて、ひっそりとう

なだれた梨花に、
「高明寺家の手勢が、迎えに参り申した。いかがなされるぞ？」
と、声をかけた。
梨花は、すっと、立った。
「わたくしは、戻りませぬ」
「されば……、多門夜八郎殿に、従いて行かれるか？」
「従いて参ります」
「よし、きまった！　さ、ござれ」
柿丸は、燭台のあかりを吹き消すと、梨花の手を引いて、おもてへ奔り出た。
と——。
夜八郎の姿は、どこにもなかった。
「おゃ！　わしらを置いて、逃げるとは卑怯！」
柿丸が、叫ぶと、
「ここだ」
夜八郎の返辞があった。
夜八郎は、建物の蔭に、毛利伝十郎が乗って来た馬に、またがっていた。
「梨花どのは、馬をこなすことは、どうじゃ？」
柿丸が問うと、梨花は、かぶりを振った。
「習うて居りませぬ」
これをきくや、夜八郎が、手をさしのべた。
「乗れ」
梨花は、夜八郎の心の裡を読みとりかねて、一瞬、ためらったが、斜面を駆け上って来る騎馬の音に、はっとなって、その手にすがった。
柿丸は、すでに、自分の乗って来た馬に、またがっていた。
二騎は、追手と反対の方角へ、疾駆しはじめた。
夜八郎も柿丸も、ただの乗り手ではなかった。
梨花は、必死に、夜八郎のせなかにしがみついて、まぶたを閉じていた。
ふしぎな陶酔感が、梨花のからだをひたしていた。
男の体軀の逞しさを、頬や腕や胸に、じかに感じながら、疾駆するがままにまかせていることに、梨花は、はじめて、若い血の燃えるのをおぼえたのである。
この男は、つい、先刻、自分のからだを、弄んだ憎むべき人物であった。にも拘らず、梨花は、もう、みじんも、憎悪を抱いてはいなかった。
自分は、文字通りすがりつくべき男を、得たのである。
その意識が、はっきりと、心にあった。
梨花は、不幸な育ちかたをした娘であった。
梨花の母は、梨花を生むとすぐ、亡くなった。美しく、優しい婦人であった、ときく。梨花にとって、第一の不幸がそれであった。
第二の不幸は、父高明寺高政が、城取りの野望の権化で、わが子のことなど一顧もしない冷酷非情の武将であったことである。梨花は、父に抱かれたことはおろか、優しい言葉ひとつ、かけられた記憶がなかった。

第三の不幸は、つぎつぎにとりかえられる義母が、一人のこらず、意地悪な女だったことである。そして、梨花を守ってくれる老女も侍臣もいなかったのである。

梨花の十九年間は、完全な孤独であった、といえる。

もし、このような不幸な育ちかたをしていなければ、自分を犯した男に対して、すぐに憎悪を忘れることはできなかったであろう。

十九歳の若い生命は、いまようやく、自由の世界へとび出して、はつらつとはばたこうと、しているようであった。

逞しい男に、しがみついていることが、こんなにも、快いことなのか。身がおどるにつれて、心もおどっていた。

「あっ！」

突如、梨花は、悲鳴をあげて、宙をもんどりうった。

馬が、かなりの幅の川を跳び越えた瞬間、前脚を折ったのである。

ひらっと、はねあがって、草地に立った夜八郎は、つづいて、たくみに跳び越えて来た柿丸が、たづなを引いて、

「これに乗られませい」

と、すすめたが、黙って、夜明けの狭霧（さぎり）の中をせわしく蹄の音をひびかせて追って来る黒い速影の群へ、視線を置いた。

「それがしが、この川ぶちで、なんとか、くいとめ申す！」

柿丸が、馬からとび降りて、叫ぶと、夜八郎は、

「ばかを云え」

と、云いすてておいて、その馬へ、ひらりと、またがったか、とみるや、川面の上を躍って、追手陣めがけて、逆に、まっしぐらに、馬をとばしはじめた。

夜八郎は、追手を、七八騎と、看ていた。

これは、まちがいなかった。

指揮をとるのは、高明寺高政の甥にあたる高明寺源太郎といい、まだ二十歳をこえたばかりであったが、膂力三十人力と称される巨漢であった。

梨花を、いずれ、わが妻に、と心にきめていたので、拉致された、ときくや、憤怒凄じく、ただ一騎で、陣屋をとび出したのであった。

二里を迅駆けて、ようやく、七騎の血気武者たちが追いつくのを待ち、四方へ奔らせ、焼け砦に、梨花がつれて行かれた、とつきとめたのであった。

こちらが、麓に到着するや、はやくも遁走を企てる敵を、

――小面憎し！

とばかり、馬脚をあおった高明寺源太郎は、一気に追いついて、討ち果す闘志を、全身にみなぎらせていた。

追手勢にとって、邪魔であったのは、夜明けの狭霧であった。

これがなければ、もっと早く、追いつけたはずである。

ようやく、あと一息と源太郎とその供七騎が、闘志を昂めた――その時である。

狭霧の中を、むこうから、逆に、こちらへ向って、一騎が疾駆してきたのである。

「なんだ、彼奴っ！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.